

# P T S D の 理 解 と 対 応 ワ ー ク シ ョ ッ プ

期 日 : 2011年7月31日(日) 10:30 ~ 16:00 (昼休みを1時間はさみます)

受講対象 : 医療・相談・福祉・教育に関わる専門家、学生、および関心のある方 (定員: 20名)

会 場 : 東北大学教育学部棟 2F201 教室

お問い合わせ: 東北大学臨床心理相談室・東日本大震災PTG (担当: 若島 rxv11606@nifty.com (090)3982-3245)

## 講 師 紹 介

講 師 佐藤 克彦 先生

東京医科歯科大学医学部卒業、同大学精神科研修後、東京足立病院、東京都健康長寿医療センターを経て、東京都教職員互助会・三楽病院・精神神経科・医長となる。日本TFI協会、会長。日本ブリーフセラピー協会、顧問。海上保安庁第三管区、心のネットワーク、精神科医。モットーは、何事も「役立つときに、役立つ範囲で、役立てる」という実用主義(プラグマティズム)。常に現場での有用性を重視した臨床を心がけている。

## 研 修 概 要

未曾有の大災害が起きて数か月が経ちました。多くの方々が様々な傷を受け、様々な喪失を経験しました。安全の確保のために、生活の保障のために、復興への歩みのために、様々な取り組みが必要です。

財源の確保は政治を生業とする方がしていかなければなりません。それが彼らの役割であり義務と言えるでしょう。仮設住宅の設置は建築を生業とする方がしていかなければなりません。それが彼らの役割であり義務と言えるでしょう。そして私たちは、心に携わるサービスを生業とするものとして、私たちの役割と義務を果たしていかなければなりません。では私たちに、いったい、何ができるのでしょうか？

心の傷(トラウマ)があるのだからトラウマワークを行えばよいのでしょうか。あるいは喪失体験をしたのだからグリーフワーク(喪の作業)を行えばよいのでしょうか。あるいは行ってはいけないという可能性はないのでしょうか。

仮にトラウマワークやグリーフワークを行うべきだとしても、それらのワークとして知られているどのような技法を行えばよいのでしょうか。有効だというエビデンスがある技法だけを行えばよいのでしょうか。とするならば否定的なエビデンスが出たとたんにその技法の使用を中止すべきなのでしょう。逆にエビデンスがない技法は行ってはいけないのでしょうか。たとえそれが将来、有用なエビデンスが出るとしてもです。それとも別の基準で選ぶべきなのでしょう。だとしたら、それはどんな基準なのでしょう。

そして最後に、その採用した技法を、どのように行えばよいのでしょうか。それとも技法の選択さえ間違えなければ、どのように用いようとも、一定の効果を発揮してくれるのでしょうか。あるいは逆に、どのように用いるのかさえ間違えなければ、どのような技法を用いようとも、一定の効果を発揮してくれるのでしょうか。

現代。いつしか心の時代と呼ばれるようになりました。様々な情報や技法があふれています。現在。国難の時を迎えています。私たち。心に携わる現場の人間は今こそ、氾濫する情報や技法に惑わされずに、未曾有の困難を前にした目の前のクライアントの方々のために私たちが役立たすためにはどうしたらよいのかを考えなおすときです。そして、私たちに課せられた役割と義務を果たすときです。この研修をとおして、少しでもそれを実現することを目指しています。みなさん、どうぞ、よろしく願いいたします。